



【この道しかない春の雪ふる】

桐生東部教会 三浦啓（雪掘りキャンプスタッフ）

今回の十日町雪掘りキャンプでは、たくさんの雪に向き合いました。雪掘りキャンプでこれだけの雪を掘るのは久しぶりのことです。参加者のみんなが雪に触れ、雪掘りを経験し、雪国で過ごすことの恵みと大変さを実感したことと思います。

また、今回は講師の方々や牧師先生方のお話をたくさん聞くことができました。能登半島地震、奥能登豪雨水害の被災地から被災地支援の働きに従事しておられる菅由美子さん（Human & Nature Japan 代表）、小林啓太さん（ボラキャンすずスタッフ）が参加してくださいました。12月に菅さんの発案で動いたクリスマスのクッキープレゼントの企画に、私が園長をしているにじいろこども園も参加させていただきました。園でクッキーを焼き、1078袋を町野町にあるもとやスーパーに送らせていただきました。菅さんのお話の中で、被災地の皆さんのがクッキーを喜んでくださったという話があり、私はまだ能登の被災地には行けていませんが、少しだけ被災地の皆さんと繋がれたような気持ちになれました。

菅さんと小林さんのお話を聞き、今も能登の被災地では復興に向けた途上にあり、圧倒的に人手が足りていないことを知らされました。私もそうですが、きっと多くの人が「能登は今も大変なのだろう」と想像しながらも、被災地に出かけるところまで至っていないのだと思います。今回、具体的に菅さんと小林さんから「能登に来てください」、「助けてください」という声、想いを受け取りました。小林さんのお話の中で、能登の人々が「助けてください」と言えない気質がある、というお話を聞きました。助けが必要でも、自分で抱えて何とかしようとする人が多いのでしょう。復興に向けて一生懸命に歩んでいた人が自殺という悲しい選択をするケースも少なくないとお聞きし、なんとも言えない気持ちになりました。被災地で人手が足りていないということは、必要な作業が進まないだけではなく、「被災地のことが忘れ去られているのではないか」という不安や孤独感、絶望感を被災者に抱えさせることになります。「助けてください」という声や被災地からの要望を待つのではなく、イエス様が町や村を訪ね歩いて助けを必要とする人々に出会いに行ったように、私も被災地に行って、出会うことから始めたいと思いました。そこから、「助けて」と言える関係性が作られていくのでしょう。

2004年10月23日に中越地震が起き、十日町教会でボランティアセンターが開設されました。ボランティアセンターを開設するのは簡単なことではありません。ボランティアセンター開設の背景には、当時の十日町教会牧師の新井純先生が震災前から地域の方々との関係

を構築していたことがあったのだと思います。

今回の講師の菅さんや小林さんを雪掘りキャンプにお招きできたことも新潟地区から長倉先生、玉置先生、野澤先生が事前に能登へ足を運び、一人一人に会ってくださったからです。また今回の雪堀りキャンプに30名の参加者が与えられたのは、日常の新潟教会や京都葵教会での牧会や交わり、会津北嶺高校、新潟地区での交わり、さまざまな繋がりがあるからです。改めて、日常での交わりや繋がりが有事や緊急時にその賜物(力や協働、支え合い)を発揮することを再確認させられました。

また、問われたこともあります。柴田さんのお話の中で、“村八分”についてのお話がありました。村社会の中で、なんらかの理由で地域の住民が結束してある人と火事と葬式を除いて交際を断つという制裁行為のことです。つまり二分の付き合い程度に留めるというものです。柴田さんは、東日本大震災の被災地で村八分のような対応をされている方を見て、「なんて酷いことを」と思われたといいます。しかし、柴田さんは、自分はそもそも自分の生活する場で地域の方々と二分程の付き合いができるかと考え、二分程の付き合いもできていない自分に気付かされたと言います。私も自分の住むコミュニティで二分程の付き合いもできていません。日常の繋がりが大切だと思いながらも中途半端な自分がいます。

雪掘りキャンプでは十日町教会員のお宅へ行き、雪掘りのお手伝いをさせていただきます。家に行くと、お茶やお菓子、昼食などを出してくださり、いろいろなお話もします。教会の周りで雪掘りをしていると、近所の方々が声をかけてくださいます。十日町では、自分の家の周りの除雪をするだけではなく、隣の家やご近所の除雪も手伝うといいます。雪を取り除けるだけではなく、人ととの間にある見えない壁も取り除かれるような気がします。大雪が降る生活での除雪は大変なのですが、一方で雪を楽しみに繋げる十日町雪まつりや雪が地域の方々との繋がりを生むきっかけや機会になることも大事なことだと思いました。ただし、除雪にも様々なルールがあります。融雪溝の時間帯や雪をどこに捨てるのかなどルールを守らなければいけません。そのようなルールや配慮が必要ということは、雪掘りキャンプの共同生活でも同じことが言えます。被災者生活体験十日町雪掘りツアー(十日町雪掘りキャンプの前身)で最初に十日町に来た時には、ゴミの分別ができていなかったり、教会や幼稚園、地域の方々への配慮が足りずによく怒られていました。十日町雪掘りキャンプではただ楽しむだけではなく、そのような大切なことも学べるのが魅力の一つだと思います。

この十日町雪掘りキャンプはたくさんの方々の支援によって成り立っています。私たちを受け入れてくださる十日町教会、十日町幼稚園の皆さん、寒河江先生のご家族、地域の方々に心から感謝したいと思います。また陰でこの活動を支援くださっている関東教区宣教部、新潟地区の皆さん、キャンプスタッフ、参加者を送り出してくださったご家族、教会、学校に感謝致します。そして、導きによってたくさんの出会いと交わりを与え、キャンプを始めから終わりまでお守りくださいました神様に心から感謝致します。





▲雪まつりでの一番好きな写真です（桑名）

※映っているのは桑名さんではありません。

買った時の煩わしさ、スコップに効率よく最大量の雪を載せる掘り方など、豪雪地帯での暮らしに関して全くの無知だった私にとって、そこで見るもの、聞くもの、触れるもののすべてが新鮮で、驚きに満ちたものでした。除雪式の屋根や縦向きの信号機、除雪構、融雪パイプ、雪まつりなど、街のいたるところで、雪と向き合い、活用し、共存しようとしている様子を見てとることができました。

学んだことの二つ目は、支援の形が労働や物資供給だけではないということです。被災支援学習として、実際に被災地へボランティアに行かれた方からたくさんの貴重なお話を聞かせていただきました。その中で特に印象に残ったのは、「『また来るね』という声掛けが、被災者にとって一番嬉しい言葉」だということです。実際に地域の方のお宅に伺って雪掘りをさせていただく中でも、人に活力を与えるのは、労働力という援助以上にコミュニケーションであることを実感しました。

そして最後に三つ目。それは、先に述べたこのキャンプで学んだ二つのことは、実際にこのキャンプに参加しなければ学べなかっただろうということです。テレビの画面越しの映像やスマホに流れてくる雪崩のような文字列だけでは把握できない情報が、このキャンプの中にはありました。新雪のようにふわふわで曖昧な認識は、自らの足で何度も踏み固めることで固く安定した足場になることを学びました。

【雪掘りキャンプ感想】会津北嶺高等学校 桑名駿

今回雪掘りキャンプに参加し沢山の経験をすることが出来ました。雪掘りでは、今までにない雪の多さや見たことの無い道具など沢山の初体験が出来ました。

被災支援学習では、自分が経験したことのない震災の話やマスメディアだけでは知ることの無い話を聞けて非常にいい経験になりました。

【十日町雪掘りキャンプ2025感想文】

京都葵教会 山下周一

私が今回の十日町雪掘りキャンプを通して学んだことは三つあります。

ひとつは、雪と共に生きる難しさと楽しさです。2階の高さまで積もった雪の上を歩くこと、固めた雪の上にダンプを滑らせて除雪すること、片足がすっぽり雪に嵌

った時の煩わしさ、スコップに効率よく最大量の雪を載せる掘り方など、豪雪地帯での暮らしに関して全くの無知だった私にとって、そこで見るもの、聞くもの、触れるもののすべてが新鮮で、驚きに満ちたものでした。除雪式の屋根や縦向きの信号機、除雪構、融雪パイプ、雪まつりなど、街のいたるところで、雪と向き合い、活用し、共存しようとしている様子を見てとることができました。



美雪公園の雪山登り

キャンプインする前の私は、初めての経験と新たな出会いへの期待に胸を膨らませていた一方で、他の教会の人たちと上手く馴染めるのか不安に思うところもありました。ですが、初日の夜の時点でそれは杞憂だったと分かりました。あまり大人数の空間が好きではない私が、キャンプ後に「寂しい」と感じてしまうくらいに、あのメンバーとあの場所で過ごした時間は居心地の良いものでした。企画や運営に奔走していただいたスタッフの皆様、遠方から遙々来ていただいた講師の方々、このキャンプを開催し、援助してくださった関東教区の皆様、そしてかけがえのない出会いの場を与えてくださった神様に感謝の気持ちしかありません。

私は、この春から社会人として働き始めます。ちょうど年末から春先までが繁忙期の仕事なので、正直、来年度の雪掘りキャンプに参加するのは厳しいと考えていました。しかしながら、今回このキャンプの楽しさと意義を味わってしまったことで考えが変わりました。全日参加できるかはまだ分かりませんが、来年の二月も私は十日町にいるでしょう。

【雪掘りキャンプ感想】

新潟教会 村田茜

これまでで一番、体を動かした回になりました。それだけ雪が多くあり大変だったということですが、それと同時に、雪と共に生きることへの愛情というのか、誇りというのか、とにかく温かい何かをもっていらっしゃる十日町の方々の思いに触れる機会がこれまでで一番与えられた回でもありました。それは、日頃私が目にする、そこに住んではいない人間が好きなように部分的に切り取って、あたかもそれが全てかのように形作ったものからは到底感じられないものでした。普段の自分だったら、いやいや私はそういうのは・・と断ってしまうだろうけれど、エベレスト in 十日町にスマートとは程遠い格好でよじ登ったことや結構本当に高かった頂上から見たギュインと吸い込まれそうなくらい濃い空の青が心に残っています。自分で食べて自分で味わうことの大切さ、やらない理由はいくらでも転がっているけれど、それでも一歩踏み出してやることが生み出す小さいけど絶対に無視できない違い。いつも穏やかに私たちを迎えてくださる十日町の皆さんに感謝でいっぱいです。またお会いできる時を楽しみにしています。

【雪堀りキャンプ感想】

新潟教会 神崎結愛

今回の雪堀りキャンプは、2回目の参加でした。去年は、雪が少なかったため、軽い雪堀り体験という感じでした。ですが、今年の雪の量はかなり多かったため、去年教わったことを活かした実践という感じが私の中ではありました。ワークを通して感じたことは、十日町に住んでおられる方の知恵や、精神力は凄いなということです。ワークをする前に雪山を見た時に、果たして片付くのだろうかという絶望感が襲ってきました。私はキャ



ンプの期間中だけでしたが、毎日、毎年この雪と戦わなければいけない地元の方々は本当に大変だし、すごい精神力だなと思いました。でも、雪掘りが間に合っていないお宅があったら、何も言わなくても近所の方がそのお宅の所まで雪かきをするというお話を聞いて、一人で雪と戦っているわけではなく、お互いに助け合いながらやっているのだということが分かりました。キャンプの朝の礼拝で、寒河江先生が「弱い時にこそ強い」という聖書の箇所からお話をしてくださいました。寒河江先生もおっしゃっていましたが、まさにこの箇所は、十日町に住んでおられる方々の強さの秘密を表しているなと感じました。災害級の雪が襲ってきて、一人一人苦しい思いをしている状況だからこそ、その苦しみをお互いに理解して分かち合うことができるのだと思いました。そこから、誰かのために頑張ったり、人を思いやったりする「強さ」が生まれるのだと分かりました。私も苦しい状況にいるときや、自分の弱さを感じたときにこそ、誰かと助け合うことができたり、誰かの痛みを分かったりすることができる「強さ」を発揮できることを忘れずに生きていきたいと思いました。

また、夜の災害支援学習で一番印象に残ったことは、現在の能登の悲惨な状況です。能登地震から何日も経っていても、人手不足で復旧できていない現状を知り、とても驚きました。知られたくないことは報道しない、都合の悪いことには見て見ぬふりをする日本の政府は怖いと思いました。自分にできることは小さくても、被災地の方々のために何か行動していける人になりたいと思いました。三月に新潟教会の能登スタディーツアーに参加させてもらうので、自分の目でたくさんのことを感じて、勉強していきたいと思います。

【雪掘りキャンプ感想】

同志社大学1年 神崎結希

私がこの雪掘りキャンプを通して感じたことは、「それぞれに役割がある」ということである。今年の十日町は雪が多く、掘っても掘っても作業は終わることがなかった。皆で協力しながらやらなければ、ひとりの力だけでは到底雪をどけることは出来なかった。雪の壁の前で自分の微力を感じるとともに、十日町で生きる人たちのすごさを感じた。そのような状況の中で周りを見渡すと、みんなただひたすら自分にできることを一生懸命やっていた。どんどん雪を掘り進めていく人、その雪を運ぶ人、地面に撒いた雪が固まって凍らないように地道に碎く人、支持を出す人、タイムキーパーでみんなに休憩しようと声をかけてくれる人、ボランティア先の人とお話しする人・・・。どの役割も欠かすことのできない大切なものだった。人は得意なこと不得意なことがあるが、雪掘りメンバーひとりひとりがいま自分にできることを一生懸命やっている姿を見て、「私もできることを頑張ろう!」「私にも役割があるのではないか。」と思えた。このようなことを感じたのは雪掘りの場面だけにとどまらない。十日町教会で共同生活を送る中で、ご飯を用意してくれる人がいたり、お皿洗いをしてくれる人がいたり、布団を敷いてくれる人がいたりといろいろな役割を担つ



Oさん宅にお邪魔した時の写真。大きな犬のMAXくんと遊びました。

てくれる人がいた。実際の被災支援でもひとりひとりの力は小さいかもしれない。でもそれには役割があり、そのひとつひとつがどれも欠かすことのできない大切なものなのだと学んだ。

最後に・・・

この4泊5日の雪掘りキャンプはとても濃く、多くの学びがありました。お支えいただいた皆様、ありがとうございました。来年もぜひ参加したいです。

【2024年度出会う！！働く！！十日町雪掘りキャンプ】

京都葵教会 玉置豊大

私は今回で雪掘り参加3回目となります。コロナ禍を除く過去2回とも歴史的小雪と言われ、2019年度の雪掘りは泥掘りキャンプで、前回は小雪と圧雪された雪を掘るのが大変だった年でした。

しかし今年は過去数年間類を見ない大雪で現地の方でも久々の雪と仰っていましたが私にとっても、とても貴重な経験でした。今回私は全日参加で3軒のお宅で雪かきをさせて頂き、過去に足が雪に埋もれてしまう経験がなく、何度も転倒してしまい大変でした。ですが雪国の方々にとってはこれが雪の降る冬の日常なんだと肌で感じました。また初日に十日町教員の岡田さんのお話で雪国に住む人々の暮らしを話して頂き、雪があるからこそ生業や暮らしがあり雪はそこに暮らす人々に恩恵と同時に厳しさをもたらす物だなと思いました。これが雪の降る冬の日常生活なんだとお聞きし本当に頭が下がる思いです。ワークでは私個人の課題もあり来年度は克服していきたいと思います。

また夜の被災支援学習ではこれまで多くの被災支援を行ってきた長倉牧師や柴田牧師、また能登の支援をされてきた小林さんや菅さんの貴重な経験を話して頂きました。

また昨年、元日に石川能登半島を襲った令和6年能登半島地震発災後から支援をされてい

る小林啓太さんから被災地支援をされている方の声を実際に聞くことができとても貴重な時間でした。今回の被災支援学習では実際に能登半島でのボランティアの主な活動内容として輪島では工芸品の輪島塗の販売支援やお仏壇の回収等を、継続的にサポートを行ってこられたとお聞きし私は普段、被災地と接点が無くメディアから得る情報しかなくとても貴重なお話でした。またこれから能登地方での避難生活をされている方々の精神的なサポートが必要になってくるとのことで遠くに暮らしている私たちは実際に何ができるのか…もちろん能登産の物を購入することも被災地を想う事になるので今できることをしたいと思います。

また菅由美子さんのお話で過去の災害の被災地、熊本や西日本豪雨地域からの支援のお話があり、私がこのお話で感じたのは災害はただ命や住まい・営みを奪うというマイナスのイメージだけではなく、人々の繋がり・心の温かさを再実感する出来事でもあるのではない



かなと思います。

柴田信也牧師のお話で阪神淡路大震災 兵庫南部大地震、私は発災当時まだ母のお腹の中にいて震災当時の事はほとんど知らない事が多く、震災の記録を残した写真集が母の実家にあり幼少期に見たり TV で流れる過去の映像しか無く毎回柴田牧師は違った視線から震災のお話をされて当時はこうだったんだととても学びの時でした。また震災後の神戸市が計画した復興計画が 2 ヶ月で計画されたとされているが私個人では焦り過ぎているように思えてなりません。ハード面『街並み』ソフト面『心の支援』…どんなに綺麗で住みやすい神戸だとしてもソフト面がしっかりしていないと結果的に 30 年経った現在、当時住んでいた人の 4 割しか債権者が戻ってきておらず、結果的にソフト面の支援が追いついていなかったのではないかと私は思えてなりません。本当の復興とはなんなのかやはり私には分からずですがそれが出来ることをしていけば支援につながっていくのではないのかなと思います。

また来年度も雪掘りキャンプが開催されたら参加したいと思います。

【雪掘りキャンプ感想】

新潟教会 野間嗣恵

僕は今回で雪掘りキャンプは 2 回目の参加でした。去年は比較的雪が少ないと言われていてそこまでキツイと思っていなくて楽しみながらワイワイ雪掘りをしていたように覚えています。正直 2 月の最初の週までは今年もそうだろうと思っていました。ですが雪掘りキャンプが始まる何日か前に大寒波が到来してきてこれは雪掘りどうなるだろうと不安になっていました。実際に雪掘りキャンプが始まって 1 日目はそこまでハードなワークはなく、軽く教会付近を雪掘りする程度でやっていました。2 日目が僕の中でとても忘れられないくらいに大変だったように思います。2 階の窓が見えなくなってるくらいに積もってる家を見てまず驚きました。そこから窓が隠れていたら日差しも入らないとの事で 1 階の窓が見えるまで掘り

続けました。途中から僕は足、腕がパンパンになってしまい午前中に雪掘りしただけですぐバテてしまいました。午後には他の班の方も手伝ってくれてなんとか 1 階の窓が見える所までいけてとても達成感を感じると共に雪掘りの大変さを改めて感じれる時でした。

3 日目には午前少し教会付近の雪掘りをしてからは十日町幼稚園の子達と一緒に遊ぶ機会がありました。そこでもまた自分の運動不足を痛感させられました。子ども達におんぶ、だっこを頼まれて永遠と走り回る事になって、雪に足が埋まったりもしてとても大変だったように感じました。



そして今回は僕は途中で帰らないと行けなかったので 3 日目でワーク終わりだったので正直最後まで残っていたい欲が雪掘りが始まる前より強くなっていたことに帰ってきてから気付かされました。雪掘りが始まる前は途中で帰る予定が楽しみで早く雪掘り終わって帰りたいとかも思っていたのですが初めましての人達(特に会津北嶺高校の子達)とともに仲良くなることができて帰りたくない、最終日まで居たかったと思うようになりました。

今回の雪掘りキャンプは去年に比べたら大変な事もあったりしたけれどそれ以上に去年よりも楽しめたようにも思ってます。また今回初めましての人と仲良くなれて沢山話して、夜には青年達で人狼したりと、とても良い思い出になりました。来年も来れたらもちろん来たいです。雪掘りでしか中々会う事が出来ない人達とまた十日町で再会出来ることが今から楽しみです。あー、早く来年の 2 月にならないかな… 今年の雪掘りに参加出来て沢山の思い出も作れてとても充実できた 3 泊 4 日になりました！ ありがとうございました！

【雪堀りに行く理由】

京都葵教会 内山友也

ここ数年、「雪掘りをするための場所探し」という認識がいつの間にか根付いていた。しかし、今年は私が初めて訪れた年の「十日町らしさ」をダイレクトに味わった雪掘りキャンプとなった。

久しぶりに家屋を埋め尽くすような高さまで積もった雪を見て、少し懐かしさを感じながらワークに励んだ。率直に感じたのは体の衰え。まだ若いと言われる歳ではあるが、やはり普段から慣れていない作業はすぐに疲労する。

また、「雪を友とする」と、以前に聴かせてもらったが、到底自分自身にはその言葉を語る資格もないと痛感する。

しかし、そのような思いを抱きつつ、微力ながら作業をする中で「楽しい」と思える出会いが、雪掘りキャンプにはいつも与えられる。特に、人と人が出会う豊かさがこのキャンプには醸成されていくのを感じる。

様々な「痛み」を学び、それを分かち合い、時間の経過と共に人を理解していく。そういった時間が自分自身にとって「楽しい」と感じられる喜びへと変えられていく。

初めて来た時と現在では明らかに体力は変わった。しかし、ここで出来る喜びはいつも変わらない。きっと、私がこの十日町に訪れるいちばんの理由はそこにあるのだろう。

そして、この感覚をより多くの人に知ってもらいたいと思うようになったからこそ、毎年仲間探しをしている。今年も京都から参加したメンバーを温かく迎えてもらえたことに心から感謝。そして、来年また十日町を訪れて、縦と横の繋がりを深く見つめられ時が与えられることを心から願っている。





「あたたかな時間」

【雪堀りキャンプの感想】 自由学園 中川和作

この十日町雪堀りキャンプでは、人のあたたかさを感じる機会が多くありました。

雪を堀り進める中で、先の見えない作業に呆然としてしまうこともありましたが、共に取り組む仲間がいたことによって、とても力をもらいながら作業を行うことができました。他の誰かと共に物事を進めていくという事が、自分にとって大きな強みになるのだと、作業を進める中で感じました。

他にも礼拝や被災支援学習など、様々な場面で物事と向き合い考えることができました。この雪堀りキャンプを通してたくさんの人と出会い、互いに関わりを持つことができ、とても良い経験となりました。ありがとうございました。

【雪堀りキャンプ感想】

南山教会 大塚棕

2020 年の雪堀りキャンプは積雪もなく、リンゴ農家さんへ泥堀りに行き、帰りの車内でコロナウィルスの蔓延が危惧される記事を読んだことを思い出します。それから 5 年ぶりに、二回目の参加となりました。

まさにトンネルを抜けるとそこは雪国でした。初めて見る積雪 4m 越えに恐怖を覚えました。そこで雪“かき”ではなく雪“堀り”的

意味がよく分かりました。掘っても掘っても銀世界！歩けば沈む雪の中。途方に暮れる作業に頭の中も真っ白になりました。

チームの声かけに助けられました。「雪落とすよ～」「車来てるよ～」一つひとつのコミュニケーションが力となりました。受け入れてくださった十日町教会の教員さん宅では作業より会話を求めてくださる方も多く、交わる時間こそ宝だと思いました。お話をすると「去年うちに来た〇〇さんは元気？？」と年に一度の時間も大切に生かされていると思いました。帰り際は「また来てね～」の挨拶に来年も楽しみになりました。

被災支援学習では、岡田さんから十日町の生活。長倉先生より教会が担えること。小林さんとカンちゃんからは能登半島の現状。柴田先生からは見る・伝える・聞くことを学びました。



雪！雪！雪！

いつなんどき、何が起こるかわからない世の中で「助けて」と言える、言われたら駆けつける関係性を日頃から築いていく事が大切だと学びました。雪掘りキャンプがその1歩を担っていると思います。

送り出してくださった南山教会のみなさま。受け入れてくださった十日町教会のみなさま。企画運営して下さった先生方やご支援いただいた関東教区さま。雪掘りを通して出会えた全ての方々に感謝します。



鮎を食べる私。本当に美味しい鮎でした。

山学ぶことができたように思いました。特に印象に残っているのは、被災地は復興したとしても、被災が終わったことにはならないということです。建物など、外見は治っても、大切な人を失った心は治ることがない。良く考えれば当たり前、すぐ分かるはずなのに今まで分からなかったという所に衝撃を受けました。これは、私の今までの興味関心、いつ当事者になるか分からぬという意識の欠如があったのだということを感じました。

以上のことから、私が雪掘りキャンプで考えたことは、人と会うこと、関わることは自分の可能性を増やすことだということです。自分に無い考え、した事の無い経験をしたり、聞いたりすることでその一端に触れることができるこのキャンプをとても素晴らしいものだと感じました。来年もぜひ参加したいと考えています。

【雪掘りキャンプ感想】

前橋教会 伊藤暁啓

今回十日町雪掘りキャンプのボランティアに出させていただいたて沢山の学びを得させて頂くことができました。

初めて家の一階が埋まるような豪雪地を見て知った雪国の日常に、その環境に対応した町の構造。ボランティアでうかがわせて頂いた地元の人たちのやさしさ。そしてこうしたボラ



初めて作る横の掘るタイプのかまくら

楽しかったです。ありがとうございました。

【雪堀りキャンプ感想】

雪堀りキャンプでは、普段の生活では味わえないようなことを様々体験、学習することができました。私自身、今回が初参加というのもあって、楽しみな反面、不安も多々ありました。参加者の皆さんと一緒に働き、学び、遊ぶうちにそんな不安も吹き飛び、最終的には本当にやってよかったなと心から思いました。参加者の皆さんも地域の方達も本当に温かく接してください、人とのつながりをとても感じることができました。来年も是非参加したいと思います。

会津北嶺高等学校 堀江友輝

【十日町雪堀りキャンプに参加して】

桐生東部教会・敬和学園高校1年 三浦架虹

今年も十日町雪堀りキャンプに参加しました。1年前も十日町雪堀りキャンプに参加したので、今回で2回目になります。

今年は十日町もたくさんの雪が積もっていると聞いていたので、楽しみにしながら十日町にきました。2日目に十日町幼稚園の職員の方の家に行き、雪堀りをしました。2階建ての家の1階部分が雪で埋まっていて、その雪を掘り出す作業をしました。午前中に私たちのグループだけでは1階部分を掘り出すことができず、午後から別のグループも来て、一緒に雪堀りをしました。雪堀りは大変な作業で疲れましたが、みんなで雪堀りをして、どんどん1階の壁や窓が出てきて、やり甲斐を感じました。みんなで力を合わせると、多くの雪をたくさん除けることができるのだと思いました。



1年前は、雪が少なかったので、少し雪堀りをしたら、休憩をたくさんしました。こたつに入ってゆっくりしたり、美味しい食事を出していただいたり、映画を観たりしながら過ごしました。でも、今年は大雪なので、少しだけ休憩するだけで、雪堀りを頑張りました。

3日目は栃尾教会で雪堀りをし、4日目は十日町教会の周りの雪堀りをさせてもらいました。雪堀りをするだけではなく、キャンプの参加者の皆さんといろいろな話をしながら作業し、仲良くなることができて嬉しかったです。初めて十日町雪まつりにも行くことが出来たことも良い思い出です。

また、夜は学習の時間がありました。私が心に残ったのは、菅由美子さんと小林啓太さんのお話です。テレビなどで能登半島の被災地のことを聞くこと



がなくなったので、私は勝手に、能登の被災地は復興したのだと思っていました。でも、菅さんや小林さんのお話を聞き、今も人手が足りていないこと、まだまだ復興のために必要な作業があることを知り、とても驚きました。私は敬和学園高校の寮に住んでいて、寮の礼拝でお話をする機会があるので、今回知ることができた能登半島の被災地のことを周りの人にもしっかりと伝えていきたいと思います。また、被災地のために私にもできることを探していきたいと思います。

今回のキャンプを通して、たくさんの出会いがあり、さまざまな経験ができたことを感謝したいと思います。

【参加者として参加して】

摂津三田教会 久保田愛策

関東教区主催「十日町雪堀りキャンプ」に参加者として初めて参加しました。2024年3月末まで十日町教会の牧師をしていましたから、受け入れ側としてキャンパーの方々をお迎えする立場で8年間過ごしましたが、参加者の立場になってわかったことがいくつかありました。

除雪体験は多くのキャンパーが経験したことがないはずですから、その不慣れは仕方がないことですし、むしろ除雪（雪堀り）の大変さを体験できることがまずは大切なことです。除雪が上手くなることが第一目的ではありません。

むしろこのキャンプの醍醐味は夜の学習会にあることを改めて教えられました。受け入れ側の時からキャンプ期間中は毎晩「今日はどんなお話を聴けるのだろう」と楽しみにしていましたが、そのことの意義を改めて発見できました。

「災害には個性がある」、「雪堀りキャンプで出会った仲間は全国各地の被災地ボランティアとして再会することがよくある」。いずれもこの雪堀りキャンプでお話ししてくださった方の言葉ですが、一口に「被災地」と言ってもその状況は様々であり、もっと言えば被災地に生きる一人ひとりの置かれている状況はみんな違います。それを肌で感じ、どのように寄り添い、お手伝いができるか・・・それを考えられるような思考回路を与えてくれるのが雪堀りキャンプなんだと知りました。そしてそのような思考回路、気持ちをもった人たちが被災地で再会し、また助け合いの輪を広げていっていることにこのキャンプの意義があることを教えられました。

これからも形は少しづつ変化しながらも、十日町雪掘りキャンプが続いていくことを願っています。

【雪堀りキャンプ感想】

新潟教会・同志社香里 新井翼

わたしが最後に雪堀りキャンプに参加したのが今から8年前、大学4年生のときでした。その後就職で長く暮らしていた新潟を離れ、大阪で仕事に追われること8年。ようやく雪の降る十日町に帰ってくることができました。今までの雪堀りキャンプで繋がった人たちやお世話になった人たちが変わらずそこにいて、とても懐かしい気持ちと自分の居場所を残してもらっていたような嬉しい気持ちになりました。

今回のキャンプでとても印象に残っていることが1つあります。このキャンプで除雪作業をする際はコミュニケーションを取りながら危険のない範囲で和やかな雰囲気の中、進められるのですが、今回のキャンプの講師として来られた小林さんは一人もくもくと作業を進めておられ、また状況に応じてこちらからお願ひするまでもなく今一番人手が欲しいところ、手を貸してほしいところにいてくださいました。その姿がとても頼もしく映り、これが今まさに支援が必要な第一線で活動しておられる方の動きなのだと勉強させてもらいました。この方の話をぜひ聞きたいと思っていたのですが残念ながら仕事の都合で途中退場することになっており、とても貴重な機会を逸してしまったのが最大の心残りです。

今回は幸運が重なりキャンプに参加することができました。次はいつになるか分かりませんが機が巡ってきたときにはまたぜひ参加したいと思っています。このキャンプでの新たな出会いと交わりに、またキャンプを実施するにあたって尽力された皆さんに感謝の意を表します。



【雪堀りキャンプ感想】

南山教会 大塚勁

5回目のキャンプ参加となりました。今回は初めて車での参加ということもあり、事前に越後湯沢に住んでいる友人に雪国の運転の注意点などを聞いていました。その際、次のように言われました。

「今年は雪が多くて大変!」「うちも交通費払って除雪しにきてくれる特殊な感性の人を募集中」

本当に、雪が多くて大変なんだろうなと感じさせられる友人の言葉に、「自分はなんで毎年雪堀りに参加するんだろうか?」と考えさせられました。

毎回思うことですが、雪堀りキャンプは意外とハードなキャンプです。でも不思議に体と心が満たされていくキャンプです。早起きして、ハードワーク、今年は雨もチラつきました。普段使わない筋肉を使います。夜は被災支援学習で頭を使います。ボランティアセンターの擬似体験となっているので限られた設備で洗い物をするのも一苦労です。語らいは夜まで続き、毎日寝不足気味です。20名での雑魚寝も、小学校の林間学校以来です。終わらない雪堀り、感じる徒労感。しんどい、痛い、暑い、寒い、冷たい、いろいろ感じます。

でも、こんなに目の前のこと集中できる経験はここにしかありません。雪掘りをしながら、自分を見つめ直す時間が与えられます。雪掘りを通して、自分と対話する時間が与えられます。黙々と作業する手を止めて、ふと周りを見渡すと、みんな黙々と作業していました。同じしんどさを知っている仲間がいるということがとても嬉しいことだと思いました。

今年は土曜日までの3泊4日の参加でした。例年よりも雪の量が多く、日々、パソコンに向かって黙々と事務作業をしている体は一日目にバキバキになりました。それでも、今年も帰ってこられたことに安堵感を覚え、新しい出会いと懐かしい再会に元気を回復しました。雪国での雪掘りという、実際に体験してみないと伝わり難いしんどさと、表現し難い達成感、それらをおそらく分けしてもらうために、雪掘りキャンプがあるのではないかと思いました。微力な除雪しかすることができますでしたが、受け入れてくださった十日町教会の皆様、キャンプを準備してくださったスタッフの皆様には本当に感謝しています。また来年も、おそらく分けしてもらいにきます。

【雪掘りキャンプ感想】

新潟教会教友 中村あずさ

仕事の都合上3日間、部分参加として夜に行われた被災支援学習に参加させていただきました。初参加です。被災支援学習の1日目長倉さんのお話では十日町雪掘りキャンプの経緯について教えていただきました。山を越えた近隣の町に住みながらも今回初めて参加することで、このような場があったことを知りとても驚き感激しました。

被災地支援学習で様々な学びがあり、実際に汗を流して雪堀ワークもあり、交流を通してつながりが生まれる。そんな場が中越地震から20年、ずっと守られてきていることに頭の中でただただ「すごいなあー。すごいなあー。」とばかり繰り返していました。

小林啓太さん、菅由美子さんからのお話からは、能登の状況や思いを教えていただき、語られる一つ一つの言葉が切実に胸に迫ってくることを感じました。インターネット、新聞等で自分なりに情報を集めてきてはいましたが、顔を合わせてお話を聴けること、つながりが生まれることと比べることで得られる現実のことばはやはり異なったものでした。そして現実に見て知ることの大切さを知りました。

柴田信也さんからは様々な被災地支援に携わってきているご経験から、ご自身が感じてられたこと、現地の方が感じていらっしゃることを教えていただきました。物事の捉え方、言葉の選び方に深い信念や思考を感じました。自身の惰性や自分にとってなじみがあったり心地良い情報を無自覚に集めるのではいけないということを改めて考えさせられました。また、誰の視点に立って物事をとらえていくことが大切なのか、ということも考えていきたいと思いました。

このような場で生まれていく交流や経験、つながりによって、様々な困難が生まれたときに助け合えたり、思いを馳せ祈り、実際の行動につながっていくということを、学習会の場に参加しただけでも感じられました。参加している皆さんの雰囲気がとてもすてきで、雪かきでへとへとなりながらも、夜は真剣に語られる言葉に耳を傾けている皆さん姿にも心を打たれました。(再び「すごいなあー」)

個人的には現在、子どももまだ小さいなどの状況はありますが、末端にでもつながらせていただいて私のできることを探して行きたいと思います。

【時空の歪み？(笑)】

栃尾教会 野澤幸宏

10年に一度と言われた寒波が前週に襲い、栃尾も豪雪に見舞われ、会堂屋根からの落雪は既に屋根まで届いている中、他人様のところの雪掘りを行っている場合ではないのではと思いつつも参加した雪掘りキャンプ、実は10年ぶりの参加でした。前回の参加は2014年度。まだ牧師どころか神学生でもなかった頃、関東教区の一信徒、一青年としての参加でした。当時、十日町教会の牧師は新井純先生。教会の前にベイマックスの雪像を作ったことを覚えています。それから個人的な体感としてはあっという間の10年でしたが、まさか同じ新潟地区に遭わされた牧師として参加することになるとは思ってもいませんでした。冒頭に記した通りの大寒波による豪雪で、十日町は栃尾以上の雪の壁に覆われていました。2日目、十日町教会員の数藤さん宅で雪掘りご奉仕をさせていただきました。休憩中、前週に10年に一度レベルの寒波が来たのに、来週また10年に一度レベルの寒波がまた襲来するという予報が出ていると話題になり、「たった1週間で10年時が進んでいるのか」、「精神と時の部屋か」となどと談笑しました。「精神と時の部屋」とは漫画「ドラゴンボール」に登場するもので、外での1日がその部屋の中では1年になり、劇中では修行のために用いられます。その会話は、内容もさることながら確かに時を超えていて、30年前、連載中だったドラゴンボールをリアルタイムで読んでいた私と、20歳も年齢が違う青年たちとが同じ話題で盛り上がることが出来るのです。この空間、いろんな意味で時空が歪んでるなあと、ひとりおかしくなりました。また今回は、昨年12月に巡回訪問した能登の被災地から、かんちゃんと小林さんがおいでになりお話くださることになっていて、その再会も楽しみにしていました。2日目の夜、小林さんとかんちゃんのお話を聞きながら、私は栃尾に帰りました。お二人の報告は、数か月前に現地を訪れ見知っているので、なおのこと胸に迫るものがありました。これからも能登の被災地を覚えて祈り、機会があればボランティアにお訪ねしたいと思いました。また3日目には栃尾に来ていただき、午前は現会堂、午後は牧師館の雪掘りご奉仕をしていただき助けられました。はたして予報通り、その翌週は再び大寒波と豪雪が襲いましたが、雪山の高さを下げていただけていたおかげで、その週の雪掘りの労力はかなり少なくて済みました。まさしく、寒波と寒波の合間、ベストタイミングのキャンプの時間を主が備えてくださいましたこと、感謝をもって報告します。



【大変…だけど元気がもらえる十日町雪掘りキャンプ】

長岡教会 玉置千鶴子(雪掘りキャンプスタッフ)

今年は『牧師が変わると豪雪になる』とのジンクス通りの冬を新潟・十日町は見事に迎えました。きっと十日町教会に着任された寒河江先生を歓迎してくれているのでしょうか…。とはいえる長らく豪雪地に住む人々にとってもなかなかにハードな冬となっており、何より除雪作業中の事故などにより怪我や命を落とす人もいる中で改めて大きな自然の力を前に人間の小ささ・弱さを思い知らされる冬となりました。その中で寒河江先生やご家族、またワーク先をはじめとした教会の方々がどのように過ごしておられるであろうか…と案じながら

十日町教会へと向かいました。今年は教会員である岡田さんから最初に全体でお話を伺うことが出来、寒波が続く大変な中にあっても忍耐強く生活してこられた・この地に住む人の強さに触れることができ、翌日からのワークに向けて思いを新たにすることができました。

2日目にあたるワークの1日目、私は教会員である数藤さんのお宅に伺わせていただきました。「流雪溝が止まる 10:30まで、まずは頑張ってどんどん雪を流してください」とのご依頼にひたすら雪を除雪し、休憩後は「雪を流しつつ、まずは(2階の屋根近くまで積みあがった)雪の高さを減らしてください」とのことでの引き続き作業をしました。終わりが遠く感じる中ではありましたが一人の業は小さくとも共に作業する仲間がいることできっと終わる!との思いの内に作業をすることができました。そしてお楽しみ♪の数藤さんお手製のお食事をたくさん頂きました。「こうやって人が来た時しか“奥様ごっこ”が出来ないから!」と楽しくもてなしてくださいり、英気を養うことができました。「さ、午後のワークを…」と思ったところ「まあまでは休憩して」とシータールーム化(暗く)した別室に案内いただき、昼食後の休憩としてぬくぬくのこたつと長岡花火の映像が歓迎してくれました。休憩後、意を決して午後のワーク・休憩と1日、数藤さんにお世話になり、この地に住む人の温かさに触れることができました。3日目は栃尾教会へ、4日・5日目は十日町教会で会計作業や後片付けなどをしました。いつももましてハードワークキャンプでしたので、帰ってきてからぐったりしつつ、再び寒波に見舞われる中で長岡も除雪に追われる日々ですが、豪雪地で生活してこられた方々やその地に集まって来られたお一人おひとりとの出会い、あるいは再会に感謝します。

また、昨年末に新潟地区被災支援担当として能登巡回訪問に伺った中で出会った菅由美子さんと小林啓太さんを被災支援学習の講師としてお招きすることができました。その出会い・繋がりが少しずつ活動の輪を広めていることを直接お伺いすることができ、嬉しく思います。雪堀りがまさにそうであったように一人ひとりの業というのを決して大きいものではありませんが、それでも人と人が出会い・繋がっていく中で輪が広まっていくことを能登巡回訪問や講演を通して体感しています。出会いや繋がりを楽しみに再び3月に能登を訪れたいと思います。

【20年後の被災地で、出会い、働き、考えた】

兵庫教会 柴田信也(雪堀りキャンプ講師)

「大変でしたでしょ。今年は大雪でねえ」と、帰神後に声を掛けられて、……。しばしの沈黙の後、「この数ヶ年、小雪の冬が続いたことから思えば、確かに雪は高く積もっていたようにも思いますが、雪国にとっての『大雪』と呼ぶほどではなく、例年並みといついいんじやないですかねえ」とお応えし、幾人かの方とそんな素っ気ないチグハグなやり取りを繰り返すことになりました。2月に入って、雪堀りキャンプの前週の降雪で、積雪は見た目にも多く感じられましたが、概ね除雪された街中では路面が見える状態でした。ですが、車の行き交う道をそれで、込み入った生活路にはおそらくは誰も手を触れていないであろう雪が背丈よりも高く積もり積もっていました。まさにそこには人が踏み入ることは出来ず、手付かずのまま。それは歩き慣れた道を使うことが出来ずに、回り道を余儀なくされ、それは時間的にも体力的にも生活上に負担を強いられるものとなっていました。十日町教会、十日町幼稚園園庭の北側にあるはずの通路にも、人を阻む雪がまさに障壁となって背を伸ばして

降り積もっています。そんな小道、路地はいたるところにあるようでした。中越地震から20年が経ち、被災地・十日町の姿は一見、震災を想起させるものは凡そありません。ですが、雪が降り積もって顕著となったのは、空き家となった住居の多さです。すなわち住まうべき家、その家の主がいなくなつたのです。それは十日町に限つたことではなく、全国いたるところで見られる高齢化による過疎化の現実でしょう。しかし災害の影響によって、加速度的に今日の事態を引き寄せることがとなつたと結論付けることには、明確な根拠を持つものではありません。ですがまた、その懸念はぬぐえません。しばらく振りに降る雪とはいえ、この間に歳を経た生活者、特に高齢者は体力的な衰えから一掃の加重なものとなり、生活上の負担をより重く感じるのは当然と言えるでしょう。

「無差別平等に雪は降る」。今回あらためて胸に刻んだ言葉です。雪を知る人は、雪の前で自らの弱さを顕わにし、その弱さゆえに、雪に立ち向かうために、一人ではなく隣人と協力し合つたのです。つまり、それぞれの立場を超えて隣人として、地域で共に生き抜くために力を寄せ合うのです。そのようにして地域に暮らし、その日々の営みを築いてきたのでしょうか。そのような、見せかけではない、口先だけではない、「隣人」としてこの地に根差した互いの暮らしを支え合ってきたのでしょう。ですが、その隣人、まさにお隣さんが右隣にも左隣にもいなくなつては、自宅の前さえ行き来することもたちどころに適わなくなつてしまつます。つまり自分の家の前の雪だけ、懸命になんとか取り除いたとしても、その隣の空き家の前には除雪されることない雪の山があり、そのために家に近づくことも、家から出ていくこともできなくなつてしまつます。地域に空き家が増える。お隣さんが空き家になる。隣人がいなくなること、それは雪国の暮らしにとつて他人事でなく、まさにわたしの生活に直結する一大事なのでしょう。雪国に根ざし、経験が培つた知恵、それを伝える人、伝えてくれる隣人がいなくなればどうなるのでしょうか。宝は雪に埋もれてしまうのでしょうか。

5年ぶりに再会を果たした十日町教会の岡田征六さん。その自宅は先代が120年前に建てた家屋。その家に産まれ、そこでの暮らしを今も引き継いで営んで来られているそうです。また、村山久夫さんも十日町を愛し、十日町に生き続けておられました。おそらくお二人にとって、わたしのような部外者、通りすがりの都市生活者が抱く感傷は、甚だ身勝手なものとお感じになられることでしょう。雪のふるさと(=雪の降る里)で暮らしてきた人々には、大いなる知恵や工夫、わたしたちの想像を超える達見があるものと確信しています。これからも、雪のふるさとの大地に潜む英知に触れあうことを楽しみにしています。

今回は小林啓太さん(“ボラキャンすず”専従コーディネーター)を、ご多忙にもかかわらず能登半島地震被災地よりお招きし、一緒に雪を掘り、また2日目に被災支援学習として直接お話を伺うことが出来ました。被災家屋の解体撤去作業の遅れが指摘されている一方で、お仏壇を引き取る活動をされていることに興味を搔き立てられました。家屋を解体するにしても、確かにご先祖さんのお仏壇を一般廃棄物として投棄することには、流石に抵抗があることはキリスト者であつても思い至ることでしょう。「仏教王国」「真宗王国」と呼ばれる風土、先祖と共に暮らす被災地に寄り添う活動に携わっておられることに、改めて被災者支援とはいかにあるべきかを胸に留める機会となりました。

今回も参加者は30名を超え、しかもそのメンバーにはニューフェイスのほか、「2年連続3回目」「7年ぶり5回目」「10年ぶり2回目」(甲子園出場校か!)と、リピーターが多いことは、大いに驚かされました。その一人ひとりは實に頼もしく、キャンプ全体を支えてくれ

ていました。成長した姿で十日町に帰ってきたこと、その再会に高揚し、雪に触れる非日常に身を晒すために、再び十日町に集まっていることに、それぞれが生活を重ねることで噛みしめる滋味、そこに雪堀キャンプの豊かさを改めて実感するのでした。高校生から初老のものを交えて世代を超えて出会う、働く、考える、それは途絶えることなく継続してきた雪堀りキャンプならではの魅力、その意義の大きさを痛感し、灯明を見る思いでした。災害を知る十日町教会、新潟地区のみなさんのみならず、被災教区としての関東教区の理解と大きな協力に敬服いたすとともに、この場を借りて深く感謝申し上げます。ありがとうございました。これからも、何卒よろしくお願ひいたします。また会いましょう。

【雪堀りキャンプを終えて】

新潟教会 長倉望（雪堀りキャンプディレクター）

今年も十日町雪堀りキャンプが無事終了しました。寒河江先生はじめ十日町教会／幼稚園の皆さん、ありがとうございました。参加してくれた皆さん、スタッフの皆さん、ありがとうございました！今年は久しぶりにしっかり雪がある十日町で、「メンタルにくる」ほどの充実した雪堀り体験ができました。「でも仲間がいたから頑張れた」というほど、メンバー同士仲良くなりました。能登半島の現場と講師を務めてくださったお二人の言葉に、想いに心搖さぶられました。兵庫県南部地震の被災地に30年寄り添い続ける歩みからの問いかけが、心の奥深くに響いています。

雪まつりから春を迎える…はずの十日町でしたが、雪堀りキャンプの後に、また寒波襲来、十日町は元通りどころかそれ以上の積雪といった様相となりました。でも、離れていてもそんな十日町を思い、また被災地を思い、心配することができる。離れていても、十日町に、被災地の知に、美しい春がやってくることを心待ちにできる。「出会い」の持つ力は本当に不思議です。

皆さん、今年も「～出会う・働く・考える～十日町雪堀りキャンプ」に参加して下さり、本当にありがとうございました。出会いに励まされてそれぞれの歩みを重ね、それぞれの経験を持ち寄って、またどこかで一緒に働きましょう！

【十日町雪堀りキャンプ会計報告】

収入の部		支出の部	
項目	金額	項目	金額
宣教部交付金	270,000	講師謝礼・交通費(4名)	115,000
参加費	121,000	十日町教会感謝献金	10,000
献金	31,490	スタッフ交通費・現地交通費	39,440
		参加者交通費補助	30,000
		保険料	12,238
		食費・日用雑貨等	127,152
		貸布団代	88,660
合計	422,490	合計	422,490

皆さまのお祈り、お支えに
心から感謝いたします。